教育いたみ

第51号

コロナ禍での学校園の様子

藍染め体験（鴻池小学校）

パーテーション作り（おぎの幼稚園）

令和３年度 教育方針（要約）

伊丹市教育長
木下　誠

はじめに

昨年度の新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちのいのちや生活のみならず、社会、経済、行動や意識、価値観にも大きな影響を及ぼし、社会全体が『答えのない問い』にどう立ち向かっていくかが問われました。

コロナ禍は、ワクチン接種が始まれば、終息するという見方もありますが、現在開発されているワクチンは、新型コロナの重症化を防ぐもので感染を予防するものではなく、コロナ禍は少なくとも数年は続くという専門家もいます。

令和3年度は、このようなことを視野に入れながら、適切な人材を適所に配置するなど「持続可能な体制」の整備に努めます。また、目の前の事象から解決すべき課題を見出し、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、「納得解を生み出す教育」を推進します。

1. 幼児教育の充実

① すべての就学前施設において、養護と教育の一体的な展開を強く意識し、受容的で応答的な教育・保育を実践します。また、「遊び」等を通して、自立心や協同性等、「非認知能力」の育成に努めます。

② 民間の力を活用し、認可保育所の誘致や保育士の確保を図り、「待機児童の解消」に取り組みます。

③ 幼児教育で培った成果を小学校へと『育ちと学びのバトン』をつなぐため、公私立や施設の種別を問わず、「発達と学びの連続性を大切にした教育」を推進します。

2. 確かな学力の育成

① 知識や技能の習得だけでなく、自分の頭で考え、判断し、自分の言葉で表現できる力、学びに向かう力・人間性等を育成するために、子どもたちが学びの主体となる「主体的・対話的で深い学び」を実践します。

② 新学習指導要領においては、コンテンツだけでなく、コンピテンシーの育成に大きな比重があることから、「教科横断的な視点」、「PDCAサイクルの確立」、「地域資源の活用」の3つの側面を大切にした「カリキュラム・マネジメント」に取り組みます。

③ 『社会に開かれた教育課程』の理念に基づき、目標を学校と地域社会が共有し、社会との連携によって、めざす学校教育の実現を図ろうとするものであり、学校運営協議会と地域学校協働活動を一体的に推進するなど、「学校・家庭・地域総がかりの教育」を推進します。

3. 新しい時代に対応した教育の推進

① 児童生徒及び教員の操作スキルや情報モラルの向上を図り、様々な学習活動においてICTを積極的に活用し、「情報活用能力の育成」に取り組みます。

② 今後の更なるグローバル化を見据え、英語による簡単なコミュニケーションが図れるよう、専科教員やALT、JTE等、専門性の高い人材による英語教育を推進するなど「英語教育の充実」に取り組みます。

③ 保護者の負担軽減や学校の業務の効率化を図るため、押印の見直しや、書面で行っていた行事への参加申し込み等、学校と保護者間の「連絡手段のデジタル化」を促進します。

おわりに

最近よく、対面かオンラインか、履修主義か修得主義か、といった「二頂対立」で教育が議論されますが、どちらかを選ぶのではなく、その時々の状況に応じ双方を使いこなす「ハイブリッド（異種の組み合わせ）型の教育」を推進し、本市教育の更なる充実・発展に取り組んでまいります。

itami　発行・伊丹市教育委員会事務局　〒664-8503　伊丹市千僧１丁目１番地　☎072-784-8081　「教育いたみ」は再生紙を使用しています